第３類

幼児体育における教育内容の検討（１）

事例研究：学生の幼児体育実施における目標意識について

山本　章雄

YAMAMOTO Akio

人間にとって「動く」ことは生きることの基本であり、単にフィジカルな面だけでなくメンタル面やソーシャル面を含む総ての能力に関与している。また、この「動く」機能は、幼児期にその基礎が獲得され発達していくことは学術的に明確であり、この時期における身体活動（幼児体育）は人間形成において大変重要な教育内容である。本研究は、将来幼児の身体活動を担う学生に教授する「幼児体育」の授業を至適な内容とするため、「幼児体育の目標意識」に関する意見調査を行い、カリキュラム作成に向けての基礎資料を得ることを目的に実施した。

その結果、学生の幼児体育実施における「目標意識」は、子どもの個別性などに配慮し、子どもの楽しめる活動を行い、身体能力を向上させる点には向いているが、精神的成長や社会スキルの獲得には向いておらず、また、今日的課題への対応についての認識も欠如していることが示された。

キーワード：教育内容、幼児体育、目標意識、テキストマイニング

1. はじめに

保育現場に於いて「身体活動」や「運動あそび」が重要であることは多くの識者によって論じられている。前橋[1]は、幼児の体育を幼児のための身体活動を通しての教育と捉えると、幼児体育は幼児を対象に各種の身体活動を通して、教育的角度から指導を展開し、運動欲求の満足と身体諸機能の調和的発達を図るとともに、精神発達を促し、社会性を身に付けさせ、心身共に健全な幼児に育てていく営み「人間形成」である、と述べている。また、幼児体育が教育である以上、そのプロセスは系統化と構造化が求められ、幼児の実態を知り、指導の目標を立て、学習内容を構造化する指導法の工夫や検討が必要である、と指摘をしている。一方、都市化、夜型化した今日の生活環境の著しい変化に伴った幼児の生活リズムの変調にも言及し、保護者や保育士自身が生活環境を整え、「健康」の理念を十分把握した視点から「幼児体育」を実施することの大切さについても論じている。柳澤[2]はこの点に関し、昔は外で遊び回ることで運動・感覚機能が養われ、さらに大勢で遊ぶことが子ども同士のコミュニケーション発達を促し、一人一人の精神的発達に寄与していたが、現在では動かなくても遊べる環境となり、身体的、精神的、社会的に充足されず成長している実態がある、と指摘している。

桐川[3]は、子ども達が十分に体を動かし、運動能力の基礎を培い、丈夫な体と健やかな心を育むことが望まれるが、子どもが体を動かす機会が減少した今日的環境では、保育士の質の高い援助と指導が求められている。また、あそびの多様性を経験することにより、子ども達自身が興味を持って自らあそびに取り組むことも必要であり、保育士は子どもに寄り添って適切な支援を行うことが大切である、と説いている。

このように社会情勢を反映した「幼児体育」の考え方には富本[4]の論もあり、現代の社会情勢により「あ

そび」、特に仲間同士での外あそびの機会が減少傾向にあり、それによって年相応の発達が不十分で、能力が低下している。それゆえに、体操やリトミック等のお稽古事を行わせているケースもあるが、子どもに「体にいいからやりなさい」といくら言ってもすべての子どもが進んで行うとは限らない、と分析している。また同時に富本は、子どもにとっての運動とは、楽しみながら行える「あそび」なのである。これは、自己決定に基づく活動であり、内発的動機で子どもが自由に行う意欲を持った活動である、と指摘しており、その具体的な策として、体を思いっきり使う外あそびは必要であり、自由な運動あそびは体力の向上ばかりでなく、社会性の強化、創造性、集中力の強化など様々な効果をもたらす。自由な運動あそびは、内容やルールが曖昧で自然発生的な活動であるが故に、仲間同士でルールを決め、役割分担をして行うため大人の関与や干渉を必要としない。子どもの身体機能等の成長・発達は大人が中心となって行うのでなく、子どもの「本能的活動欲求」に任せながら、大人はそれを見守り、あるいは喚起するような関わり方が必要である、と指摘し、幼児期の「あそび」の特性を含めながら身体活動のあり方を示している。

一方青木[5]は、子どもの身体活動に関する先行研究を整理し、以下のようにまとめている。子どもは体を動かすことで心臓・呼吸器系、骨格筋系、神経系や内分泌系を発達させ、筋力、持久力、スピード、パワーおよび柔軟性を促進することが明らかになっている。さらに体を動かす結果として、メンタルや自己概念、自尊感情および有能感等の精神的成長や、友達の感情や状態を的確に判断する能力、自分の意志や感情を上手に友達に伝える能力、ルールを守ること規範意識を持つことなど、社会的スキル等の社会的成長にも関与していることが示されている。また、意欲との関連性の可能性や脳機能や認知との関連、生活の自立、生活態度や性格形成等との関連性がある、と述べ、また併せて、大人になってからの身体活動、健康状態と幼児期の身体活動の関連についても、子ども時代の身体活動の影響は、子ども時代の健康のみならず大人になってからの健康状態や身体活動に影響し、相互作用と持ち越し効果がある、と論じている。さらに、保育園、幼稚園の在籍比率にも触れ、平成24年度現在、保育所の入所率が42.9%、幼稚園の入園率が56.0%であることを考えると、幼児期の子どもの身体活動の責任は保育園、幼稚園が大部分を担っている、とその重要性についても指摘している。

今回の研究では、将来の保育士を目指す学生達に対し、「幼児体育Ⅰ」の授業を学生の実態に即した内容で実施するため、基礎的な情報として必須である「学生の幼児体育実施における目標意識（何を目的に行うか）」「学生の幼児体育実施における回避事項意識（何を行ってはいけないか）」および「学生の幼児体育実施における行動意識（どんな行動が保育者に必要か）」がどのような傾向にあるかを知るため調査を行った。また、学生の目標意識等の実態を文部科学省が示す「幼児期運動指針」[6]と比較することにより、意識の欠落や偏りを明確にし、授業カリキュラム作成に向けての基礎資料を得ることを目的とした。

調査は、個々の学生がどのような「目標意識」を持っているかを、本音として（多様な意見として）抽出する立場を重視するため、選択回答による方法は採らず、自由記述によるアンケート調査を用い実施した。また、「回避事項意識」「行動意識」の調査においても、学生の主体的な考え方を把握することを目的に、自由記述による回答を求める形式でアンケートを実施した。

なお、アンケート調査の集計・分析に関しては、自由記述によって回答された学生の「目標意識」「回避事項意識」および「行動意識」の傾向を明らかにするため、「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の数値を用いて行うこととし、これらの数値を抽出できる「テキストマイニング」の手法を用いて検討を行った。(ユーザーローカル:テキストマイニングツール)
(https://textminiing.userlocal.jp/)

2. 方　法

Ⅰ．調査の方法および集計について

「幼児体育Ⅰ」を受講している学生の「幼児体育実施における目標意識」「幼児体育実施における回避事項意識」および「幼児体育実施における行動意識」を明らかにするため、また、文部科学省「幼児期運動指針」と比較検討するため、以下のようなアンケート調査を実施した。

・調査期間　令和3年7月7日～7月22日
・調査対象　K短期大学「幼児体育Ⅰ」受講学生81名
　　（内訳：男子7名・女子74名）
・調査方法　調査用紙による自由記述回答
・調査項目

「幼児体育実施における目標意識」

① 『保育士として幼児体育を実施する時、最も大切にする事柄は何ですか？』

② 『なぜその事柄を大切にするのですか？』

「幼児体育実施における回避事項意識」

③ 『幼児体育の実施において、最もしてはいけない事柄は何ですか？』

④ 『なぜその事柄をしてはいけないのですか？』

「幼児体育実施における行動意識」

⑤ 『実現するために、どのような行動が保育士に必要ですか？』

・集計分析　自由記述で得た記載内容を質問項目別にテキストデータとし、テキストマイニングツール（Social Insight社：UserLocal テキストマイニング）を用い集計と分析を行った。

Ⅱ.「目標意識」および「理由」について

学生が幼児体育の実施において何を目的に行うべきと考えているか（目標意識）、また、その理由はどのような事柄であるかについての全体的特徴や傾向を明らかにするため、テキストマイニング法を用い「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」を算出することにより分析を行った。

Ⅲ.「回避事項意識」および「理由」について

学生が幼児体育実施において何を行ってはいけないと認識しているか（回避事項意識）、および、その理由について全体的特徴や傾向を明らかにするため、テキストマイニング法による「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の指標を用い分析を行った。

Ⅳ.「行動意識」について

学生が幼児体育実施において目標を達成するため保育士にどのような行動が求められていると考えているか（行動意識）についての全体的特徴や傾向を明らかにするため、テキストマイニング法により「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」を算出し分析を行った。

Ⅴ．テキストマイニングの指標について

「単語出現頻度・スコア」

自由記述文書において出現する「単語」の頻度を「単語出現頻度」として回数を表記した。また、「スコア」は、一般的な文章で良く出現する「単語」（思う・である・今日）は本研究において重要でないため重み付けを軽くし、逆に、研究対象文書に特徴的に出現する「単語」に重み付け（ＴＦ−ＩＤＦ統計処理）を行った数値であり、これを「単語」の重要度尺度として表記した。

「係り受け解析・スコア」

自由記述文書における文節の、「名詞」に係る「形容詞」「動詞」「名詞」の「修飾−被修飾」の関係を抽出し、そこに使用されている「単語ペア」の出現回数を頻度として表記した。また、「スコア」は、総ての係り受け関係に対する当該係り受けの重み度を複合的に統計処理し算出した数値で、係り受けの重要度尺度として表記した。

Ⅵ. 文部科学省「幼児期運動指針」との比較

学生の幼児体育実施における「目標意識」「回避事項意識」および「行動意識」が、文部科学省が示す「幼児期運動指針」の内容とどのように一致しているか、また、差異があるかを検討するため、「幼児期運動指針」に示された項目を以下のように整理し比較の対象とした。

① 幼児期における運動の意義
　１） 体力・運動能力の向上
　２） 健康的な体の育成
　３） 意欲的な心の育成
　４） 社会適応力の発達
　５） 認知的能力の発達

② 運動の行い方
　１） 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること
　２） 楽しく体を動かす時間を確保すること
　３） 発達の特性に応じた遊びを提供すること

③ 幼児を取り巻く社会の現状と課題
　１） 子どもが体を動かす遊びをはじめてとする身体活動の軽視
　２） 遊ぶ場所、遊ぶ仲間、遊ぶ時間の減少
　３） 身体活動減少による児童期、青年期での運動能力の育成阻害
　４） 身体活動減少による、意欲、気力、対人関係能力の減弱

3. 結 果

Ⅰ. 「目標意識」および「理由」について

学生の幼児体育実施における「目標意識」の「単語出現頻度・スコア」を示したものが表. 1であり、「係り受け解析・スコア」を示したものが表. 2である。これを見ると、単語出現数では、「出来る」(27)、「子どもたち」(22)、「考える」(18)、「楽しい」(18)「楽しむ」(17)が多く、スコア（重要度）では、「子どもたち」(28.62)、「合わせる」(16.28)「発達」(15.57) が高い値となっている。また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「幼児―大切」(5)、「体育―大切」(5)、「実施―大切」(4)、「体育―出来る」(3)、「子ども―楽しむ」(3) の係り受けが多く出現し、スコア（重要度）では、「運動―向上」(4.59)、「個人差―配慮」(2.40)、「多様―動き」(2.40)に於ける数値が高い値となっている。

また、「目標意識」の「理由」における「単語出現頻度・スコア」を示したものが表. 3であり、「係り受け解析・スコア」を示したものが表. 4である。これを見ると、単語出現数では、「動かす」(69)、「考える」(67)、「発達」(49)、「楽しい」(43)、「遊び」(37) が多く、スコア（重要度）では、「発達」(44.58)、「能力」(38.41)「動かす」(37.02) が高い値となっている。また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「身体―動かす」(16)、「能力―向上」(10)、「機能―発達」(10)、「発達―促す」(8)、「身体―能力」(8) の係り受けが多く出現し、「能力―向上」(8.46)、「発達―促す」(6.55)、「身体―能力」(5.60) に於ける重要度が高い数値となっている。

Ⅱ. 「回避事項意識」および「理由」について

学生の幼児体育実施における「回避事項意識」の「単語出現頻度・スコア」を示したものが表. 5であり、「係り受け解析・スコア」を示したものが表. 6である。これを見ると、単語出現数では、「出来る」(22)、「行う」(10)、「離れる」(8)、「危険」8 (8)、「叱る」(7) が多く、スコア（重要度）では、「離れる」(5.51)、「叱る」(4.01)「危険」(2.87) が高い値となっている。また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「年齢―合わない」(4)、「子ども―離れる」(4)、「能力―否定」(3)、「体育―合わない」(3)、「運動―合わない」(3) の係り受けが多く出現し、スコア（重要度）では、「年齢―合わない」(2.00)、「否定―言い方」(2.00)、「環境―配慮なし」(1.50)「人格―能力」(1.50)に於ける数値が高い値となっている。

また、「回避事項意識」の「理由」における「単語出現頻度・スコア」を示したものが表. 7であり、「係り受け解析・スコア」を示したものが表. 8である。これを見ると、単語出現数では、「動かない」(20)、「苦手」(20)、「発達」(19)、「危険」(19)、「知らない」(19) が多く、スコア（重要度）では、「発達」(48.61)、「動かない」(16.21)、「安全なし」(15.07)「危険」、(14.05) が高い値となっている。また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「年齢―合わない」(6)、「苦手―行う」(6)、「やる気―なくす」(5)、「大切―考えない」(5) の係り受けが多く出現し、「年齢―合わない」(3.82)、「苦手―行う」(3.35)、「安全―確認なし」(3.00)、「やる気―なくす」(2.60) に於ける重要度が高い数値となっている。

Ⅲ. 「行動意識」について

学生の幼児体育実施における「行動意識」の「単語出現頻度・スコア」を示したものが表. 9であり、「係り受け解析・スコア」を示したものが表. １０である。これを見ると、単語出現数では、「楽しく」(29)、「動く」(26)、「実現する」(21)、「活動」(21)、「合わせる」(21) が多く、スコア（重要度）では、「発達」(44.89)、「実現する」(27.62)「動く」(25.49) が高い値となっている。また、「係り受け解析・スコア」を見ると、「行動―必要」(10)、「事柄―実現」(7)、「身体―動かす」(5)、「必要―考える」(5) の係り受けが多く出現し、「環境―作る」(3.33)、「事柄―実現」(2.55)、「興味―持つ」(2.50) に於ける重要度が高い数値となっている。

Ⅳ. 文部科学省「幼児期運動指針」との比較

学生の幼児体育実施における「目標意識」「回避事項意識」および「行動意識」と文部科学省が示す「幼児期運動指針」の内容との差異の結果については、「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の指標を用い検討された学生の状況や考え方との比較を行う必要があるため、後述の４、考察：Ⅳ. 文部科学省「幼児期運動指針」との比較において、結果および考察を合わせて記載することとする。

表. １「目標意識」の「単語出現頻度・スコア」
（上位20位まで）

順位	単　語	出現頻度	スコア
１	出来る	２７	０．７０
２	子どもたち	２２	２８．６２
３	考える	１８	０．９２
４	楽しい	１８	０．７５
５	楽しむ	１７	１．６７
６	子ども	１５	８．１９
７	運動	１５	７．９３
８	安全	１３	９．３８
９	動かす	１０	４．５９
１０	身体	１０	１．５１
１１	発達	９	１５．５７
１２	行う	８	０．２６
１３	大切なこと	７	０．４３
１４	合わせる	５	１６．２８
１５	もらえる	５	０．２７
１６	持つ	５	０．０７
１７	応じる	４	２．７８
１８	教える	４	０．１０
１９	知る	４	０．０４
２０	正しい	２	０．１８

表. ２「目標意識」の「係り受け解析・スコア」
（上位10位まで）

順位	係り受け	出現頻度	スコア
１	幼児―大切	５	０．５２
２	体育―大切	５	０．５２
３	実施―大切	４	０．３４
４	体育―出来る	３	０．８６
５	子ども―楽しむ	３	０．６７
６	個人差―配慮	３	２．４０
７	多様―動き	３	２．４０
８	運動―向上	２	４．５９
９	能力―向上	２	２．００
１０	想像力―創造	２	３．２２

表. ３「目標意識・理由」の「単語出現頻度・スコア」
（上位20位まで）

順位	単　語	出現頻度	スコア
１	動かす	６９	３７．０２
２	考える	６７	１２．１６
３	発達	４９	４４．５８
４	楽しい	４３	４．２０
５	遊び	３７	２０．８０
６	動き	３５	３０．６９
７	能力	３４	３８．４１
８	身体	３１	１３．２０
９	感じる	３１	５．０３
１０	必要	２９	７．０８
１１	出来る	２８	２．０５
１２	遊ぶ	２７	５．８１
１３	行う	２３	２．１０
１４	知る	１７	０．７３
１５	褒める	１６	４．５１
１６	多い	１５	０．６５
１７	新しい	１０	０．８２
１８	ほしい	１０	０．３１
１９	良い	９	０．１１
２０	小さい	７	０．９１

表. ４「目標意識・理由」の「係り受け解析・スコア」
（上位10位まで）

順位	係り受け	出現頻度	スコア
１	身体―動かす	１６	３．８９
２	能力―向上	１０	８．４６
３	機能―発達	１０	２．２０
４	発達―促す	８	６．５５
５	身体―能力	８	５．６０
６	多様―動き	８	２．００
７	能力―発達	８	１．４４
８	運動―苦手	７	１．９３
９	社会性―養う	６	３．８２
１０	運動―発達	６	０．８４

表. 5「回避事項意識」の「単語出現頻度・スコア」
（上位20位まで）

順位	単　語	出現頻度	スコア
１	出来る	２２	０．４５
２	行う	１０	０．４０
３	離れる	８	５．５１
４	危険	８	２．８７
５	叱る	７	４．０１
６	否定	６	１．８３
７	年齢	６	１．１４
８	環境	６	０．８６
９	二つ	５	０．７０
１０	合う	５	０．２１
１１	無理	５	０．１０
１２	言う	５	０．０２
１３	押し付ける	３	０．７８
１４	怒る	３	０．１３
１５	あげる	３	０．０４
１６	正しい	２	１．１５
１７	ふさわしい	２	０．５４
１８	少ない	１	０．０１
１９	遅い	１	０．０１
２０	高い	１	０．０１

表. 6「回避事項意識」の「係り受け解析・スコア」
（上位10位まで）

順位	係り受け	出現頻度	スコア
１	年齢―合わない	４	２．００
２	子ども―離れる	４	１．３４
３	能力―否定	３	１．１７
４	体育―合わない	３	１．０９
５	運動―合わない	３	１．０９
６	保育者―いない	３	０．１９
７	否定―言い方	２	２．００
８	環境―配慮なし	２	１．５０
９	人格―能力	２	１．５０
１０	他人―比較	２	１．２０

表. 7「回避事項意識・理由」の「単語出現頻度・スコア」
（上位20位まで）

順位	単　語	出現頻度	スコア
１	動かない	２０	１６．２１
２	苦手	２０	５．０１
３	発達	１９	４８．６１
４	危険	１９	１４．０５
５	知らない	１９	１．９９
６	成長	１８	９．０１
７	褒ない	１８	５．６５
８	安全なし	１７	１５．０７
９	ケガ	１７	１１．９２
１０	行動	１６	６．００
１１	行う	１５	０．９０
１２	繋がる	１３	２．２５
１３	楽しむ	１３	０．９８
１４	出来る	１３	０．４５
１５	伝える	１２	３．０３
１６	難しい	７	０．３９
１７	怖い	６	０．１８
１８	危ない	５	１．００
１９	大きい	５	０．２７
２０	悪い	５	０．０９

表. 8「回避事項意識・理由」の「係り受け解析・スコア」
（上位10位まで）

順位	係り受け	出現頻度	スコア
１	年齢―合わない	６	３．８２
２	苦手―行う	６	３．３５
３	やる気―なくす	５	２．６０
４	大切―考えない	５	０．２５
５	自信―なくす	４	２．５０
６	苦手―持つ	４	２．２２
７	意識―持つ	４	２．２２
８	保育者―いない	４	２．１５
９	安全―確認なし	３	３．００
１０	苦手―子ども	３	０．１４

表. 9「行動意識」の「単語出現頻度・スコア」
（上位20位まで）

順位	単　語	出現頻度	スコア
1	楽しく	２９	１．９３
2	動く	２６	２５．４９
3	実現する	２１	２７．６２
4	活動	２１	１０．９３
5	合わせる	２１	０．０７
6	遊び	２０	６．６１
7	行う	２０	１．６０
8	発達	１８	４４．８９
9	環境	１５	５．０４
１０	安全	１４	１０．７１
１１	楽しめる	１２	３．７５
１２	知る	１２	０．３６
１３	教える	１１	０．７６
１４	取り組む	９	１３．８７
１５	学ぶ	９	３．８６
１６	難しい	５	０．２０
１７	明るい	４	０．６０
１８	高い	４	０．１０
１９	良い	４	０．０２
２０	しやすい	３	０．５８

表. １０「行動意識」の「係り受け解析・スコア」
（上位10位まで）

順位	係り受け	出現頻度	スコア
1	行動―必要	１０	１．７６
2	事柄―実現	７	２．５５
3	身体―動かす	５	１．１１
4	必要―考える	５	０．５６
5	環境―作る	４	３．３３
6	興味―持つ	４	２．５０
7	幼児―活動	４	０．９１
8	大切―考える	４	０．３７
9	様子―把握	３	１．７１
１０	一人一人―発達	３	０．６３

４．考　察

Ⅰ．「目標意識」および「理由」について

目標意識の単語出現頻度を見ると、「子ども」「子どもたち」の出現数(合計37)が多く、スコア（重要度）においても「子どもたち」が高い数値(28.62)を示している。また、「楽しい」「楽しむ」の出現数(合計35)も多いことから、学生たちは幼児体育の実施に於いて、「子ども」を主役と位置づけ、主役が「楽しめる」内容を展開することが最も重要であると考えている傾向が明らかとなった。また、単語のスコア（重要度）を見ると、「合わせる」(16.28)「発達」(15.57)が高い値を示しており、主役である子どもたちの発達段階に合わせた幼児体育の実施も大切な目標であると認識している傾向も明確となった。同様な傾向は係り受け解析のスコア（重要度）にも表れており「個人差―配慮」が高い数値(2.40)となっており、発達段階や個人差といった個別性への配慮を重視する意識が、多くの学生によって保持されていることが示された。そのほか、単語の重要度、係り受けの結果を見ると、「安全」(9.38)「運動―向上」(4.59)「多様―動き」(2.40)も高い値を示しており、安全性に留意し、運動能力の向上を目指し、多様性を持った動きを行うことを幼児体育の目標として意識している学生の実態も明らかとなった。

一方、理由の結果を見てみると、単語出現頻度において「動かす」(69)「考える」(67)「発達」(49)の出現数が多く、スコア（重要度）では「発達」(44.58)「能力」(38.41)「動かす」(37.02)の数値が高いことより、子どもたちが動くことにより発達が促進されることの必要性が、学生の目的意識の背景として認識されていることが明らかとなった。この結果は、係り受け解析にも表れており「身体―動かす」(16)「能力―向上」(10)「機能―発達」(10)の出現回数が多く、「能力―向上」(8.46)「発達―促す」(6.55)のスコア（重要度）の数値が高くなっていることからも示されている。

上記のように、学生達の多くは幼児体育の実施において、子どもの個別性と安全性に配慮した、子どもが楽しめる活動を目指すことが必要であると考えており、その結果として、身体能力の向上、身体機能の発達を求めている状況が明らかになった。

Ⅱ．「回避事項意識」および「理由」について

回避事項意識の単語出現頻度を見ると、「離れる」(8)「危険」(8)「叱る」(7)「否定」(6)が頻度の上位に入っており、これらの単語は、スコア（重要度）でも「離

れる」(5.51)「叱る」(4.01)「危険」(2.87)「否定」(1.83)と高い得点を示している。これは、学生が幼児体育の実施に於ける保育士の行為として、現場を離れることは絶対に行うべきでなく、危険を伴う活動への誘導も回避すべきであると認識している様子が示されたものと解釈できる。また、子どもたちとの関わり合いにおいては、子どもが実施した活動を否定的な言動で評価したり、望ましくない行為を短絡的に叱責したりしてはいけないと考える、学生の思いが示されたものであると理解することができる。この傾向は係り受け解析の結果にも表れており、「子ども―離れる」(4)「能力―否定」(3)「保育者―いない」(3)などが出現頻度において多くなっていること、また、スコア（重要度）においても「否定―言い方」(2.00)が高い数値を示していることより、上記の傾向が裏付けられるものと解釈することができる。また係り受け解析において、「年齢―合わない」(4)「体育―合わない」(3)「運動―合わない」(3)の出現頻度が多くなっており、子どもたちの発育状況や運動能力に合致しない幼児体育の実施も、避けるべきであると考える学生の傾向が明らかとなっている。

また、理由の結果を見ると、「動かない」(20)「苦手」(20)「発達」(19)「危険」(19)「知らない」(19)などが単語出現頻度で多くなっており、スコア（重要度）では「発達」(48.61)「動かない」(16.21)「安全なし」(15.07)「危険」(14.05)が高い値を示している。これは、保育士が子どもたちに対して、苦手な活動や発達段階に合わない活動、また良く知らない活動や危険（怖い）と認識する活動を実施しようとすると、子どのたちの活動が止まってしまい、結果として動かなくなる状況を引き起こすことを、学生が理解しているものと考えることができる。学生のこのような考え方は、係り受け解析にも示されており、「年齢―合わない」(6)(3.82)「苦手―行う」(6)(3.35)「やる気―なくす」(5)(2.60)の出現頻度とスコア（重要性）が高いことからも推察することが可能である。

このように、幼児体育の実施に際して学生の多くは、子どもたちにしっかりと寄り添い、否定的な評価や叱責を避け、子どもの敬遠する活動や子どもの能力に合わない活動を回避することが大切であると認識している傾向が明らかとなった。

Ⅲ.「行動意識」について

目標の実現のため保育士に求められる行動についての結果を見ると、「楽しく」(29)「動く」(26)「実現する」(21)「活動」(21)「合わせる(21)」の単語出現頻度が多くなっており、また、スコア（重要度）も「実現する」(27.62)「動く」(25.49)「活動」(10.93)において数値が高いことより、学生は、保育者の幼児体育指導に於いて、自らが楽しい気持ちを持ち、しっかりと動くことによって子どもたちと一緒になり、目標を実現化していくことが重要である、と考える態度を持っていることが示されたと理解することができる。この学生の態度は、係り受け解析の結果にも表れており、「行動―必要」(10)(1.76)「事柄―実現」(7)(2.55)「身体―動かす」(5)(1.11)の出現頻度やスコア（重要度）が高い値となっていることからも推察することができる。また、係り受け解析において「環境―作る」(3.33)のスコア（重要度）が高いことより、幼児体育の実施に際しては、場所や用具の事前準備や気温、湿度など実施環境への配慮が保育士に求められていると認識する、学生の実態が表れていると考えられる。

Ⅳ.文部科学省「幼児期運動指針」との比較

学生の幼児体育実施における「目標意識」は、『子どもの個別性と安全性に配慮を行い、子どもが楽しめる活動を実施し、その結果として身体能力向上、身体機能発達を求めることが大切である。』とまとめることができた。

また、「回避事項意識」においては、『子どもたちにしっかりと寄り添い、否定的な評価や叱責を避け、子どもの敬遠するような活動や子どもの能力に合致しない活動を回避することが大切である。』が示された。

一方、「行動意識」においては、『保育士は幼児体育の指導に於いて、自ら楽しい気持ちを持ち、しっかりと動くことによって子どもたちと一緒になり、目標を実現化していくことが重要である。また、場所や用具の事前準備や気温、湿度など実施状況への配慮が大切である。』と考えていることが明確となった。

これを、２．方法 Ⅳ.文部科学省「幼児期運動指針」との比較、において整理した項目と比較すると、次の点が差異として明らかになると考えられる。

「幼児期における運動の意義」と学生の考えを比較すると、１）体力・運動能力の向上、２）健康的な体の育成の内容に関しては「目標意識」に含まれているが、その他の項目である、３）意欲的な心の育成、４）社会適応力の発達、５）認知的能力の発達の内容に関しては学生の回答意見に含まれておらず、これらの事項

に関して学生の意識が希薄であることが示された。前橋[1]は、幼児体育は「人間形成」であると述べ、身体諸機能の調和的発達を図るとともに、精神発達を促し、社会性を身に付けさせ、心身共に健全な幼児に育てていく営みであることを論じている。また、青木[5]は、精神的成長や社会スキルの獲得、また、生活態度や認知の育成にも幼児体育は重要であると述べていることから、学生への授業内容の構築に際しては、心の育成、社会適応力の発達、認知的能力の発達も幼児体育実施における重要な目標であることを内容に含め、指導することが大切であることが示唆された。

「運動の行い方」と学生の意見を比較すると、1）多様な動きが経験できる、2）楽しく体を動かす、3）発達の特性に応じた遊びの３項目すべての内容が、学生の「目標意識」「回避事項意識」の中に含まれており、文部科学省が幼児体育に求める事項とほぼ合致している状況と考えることができる。

一方、「幼児を取り巻く社会の現状と課題」の内容と学生の意識を比較すると、1）子どもの身体活動の軽視、2）遊ぶ場所、遊ぶ仲間、遊ぶ時間の減少、3）身体活動減少による児童期等での運動能力の育成阻害、4）身体活動減少による、意欲、気力、対人関係能力の減弱の４項目すべての内容が学生の意見に含まれていない。このような幼児体育における社会の現状や課題に関しては、柳澤[2]が、昔は外で遊び回ることで運動・感覚機能が養われ、さらに大勢で遊ぶことが子ども同士のコミュニケーション発達を促し、一人一人の精神的発達に寄与していたが、現在では動かなくても遊べる環境となり、身体的、精神的、社会的に充足されず成長している実態があると述べており、また、桐川[3]も、こども達が十分に体を動かし、運動能力の基礎を培い、丈夫な体と健やかな心を育むことが望まれるが、子どもが体を動かす機会が減少した今日的環境では、保育士の質の高い援助と指導が求められている、と指摘していることより、学生の知識欠如を充分に認識し、教育を実施することが大切であることが示されたと言える。

4．ま と め

将来の保育士を目指す学生達に「幼児体育Ⅰ」の授業を学生の実態に即した内容で実施するため、基礎的な情報として必須である「学生の幼児体育実施における目標意識（何を目的に行うか）」「学生の幼児体育実施における回避事項意識（何を行ってはいけないか）」および「学生の幼児体育実施における行動意識（どんな行動が保育者に必要か）」がどのような傾向にあるかを知るため調査を行い以下の結果を得た。

また、調査によって明らかになった、学生の目標意識等の実態を文部科学省が示す「幼児期運動指針」と比較することにより、幼児体育の目標意識等において求められている事柄に欠落や偏りがないかを検証し、授業カリキュラムの作成に向けて以下の示唆を得ることができた。

（1）幼児体育実施における学生の「目標意識」には、『子どもの個別性と安全性に配慮を行い、子どもが楽しめる活動を実施し、その結果として身体能力向上、身体機能発達を求めることが大切である。』とする傾向があった。

（2）幼児体育実施における学生の「回避事項意識」には、『子どもたちにしっかりと寄り添い、否定的な評価や叱責を避け、子どもの敬遠するような活動や子どもの能力に合致しない活動を回避することが大切である。』と考える傾向があった。

（3）幼児体育実施における学生の「行動意識」には、『保育士は幼児体育の指導に於いて、自ら楽しい気持ちを持ち、しっかりと動くことによって子どもたちと一緒になり、目標を実現化していくことが重要である。また、場所や用具の事前準備や気温、湿度など実施状況への配慮が大切である。』と志向する傾向があった。

（4）文部科学省「幼児期運動指針」（運動の意義）と学生の「目標意識」等の比較において、心の育成、社会適応力の発達、認知的能力の発達等の目標意識が学生に希薄であることが示唆された。

（5）文部科学省「幼児期運動指針」（運動の行い方）と学生の「目標意識」等の比較により、多様な動きの経験、楽しく体を動かす、発達の特性に応じた遊びを行う事項において、学生は指針とほぼ同じ意識を保持していることが示された。

（6）文部科学省「幼児期運動指針」（幼児を取り巻く社会の現状と課題）と学生の「目標意識」等の比較において、社会の現状を反映した幼児体育の今日的課題

に関して、学生の認識が欠如していることが明らかとなった。

5. 引用文献・参考文献

１）前橋明(2015)「元気な子どもを育てる幼児体育」保育出版社, p. 186.

２）柳澤秋孝他(2014)「こころとからだがスクスク育つ０～５歳児の発達に合った楽しい運動あそび」ナツメ社, p. 255.

３）桐川敦子(2019)「保育園・幼稚園のわくわく運動あそび」成美堂出版, p. 127.

４）富本靖(2017)「幼児期の運動遊び、児童期の体育が成長に与える影響」学苑・昭和女子大学初等教育学紀要, No. 920, pp52-60.

５）青木好子(2016)「幼児教育における身体活動の意義と課題」佛教大学大学院紀要教育学研究科篇, 第 44 号, pp1-18.

６）文部科学省ホームページ(2012)「幼児期運動指針」https://mext.go.jp/index.htm

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、学生へのアンケート調査とその分析をとおして、「幼児体育」の授業のあり方を検討したものである。分析をとおして、保育者を目指す学生の認識と、文部科学省が示している「幼児期運動指針」中の幼児期における運動の意義との間隙が鮮明に浮かび上がってきており、今後同授業を構想するうえで留意すべき点が明確に示唆されている。（担当：宇賀神一）